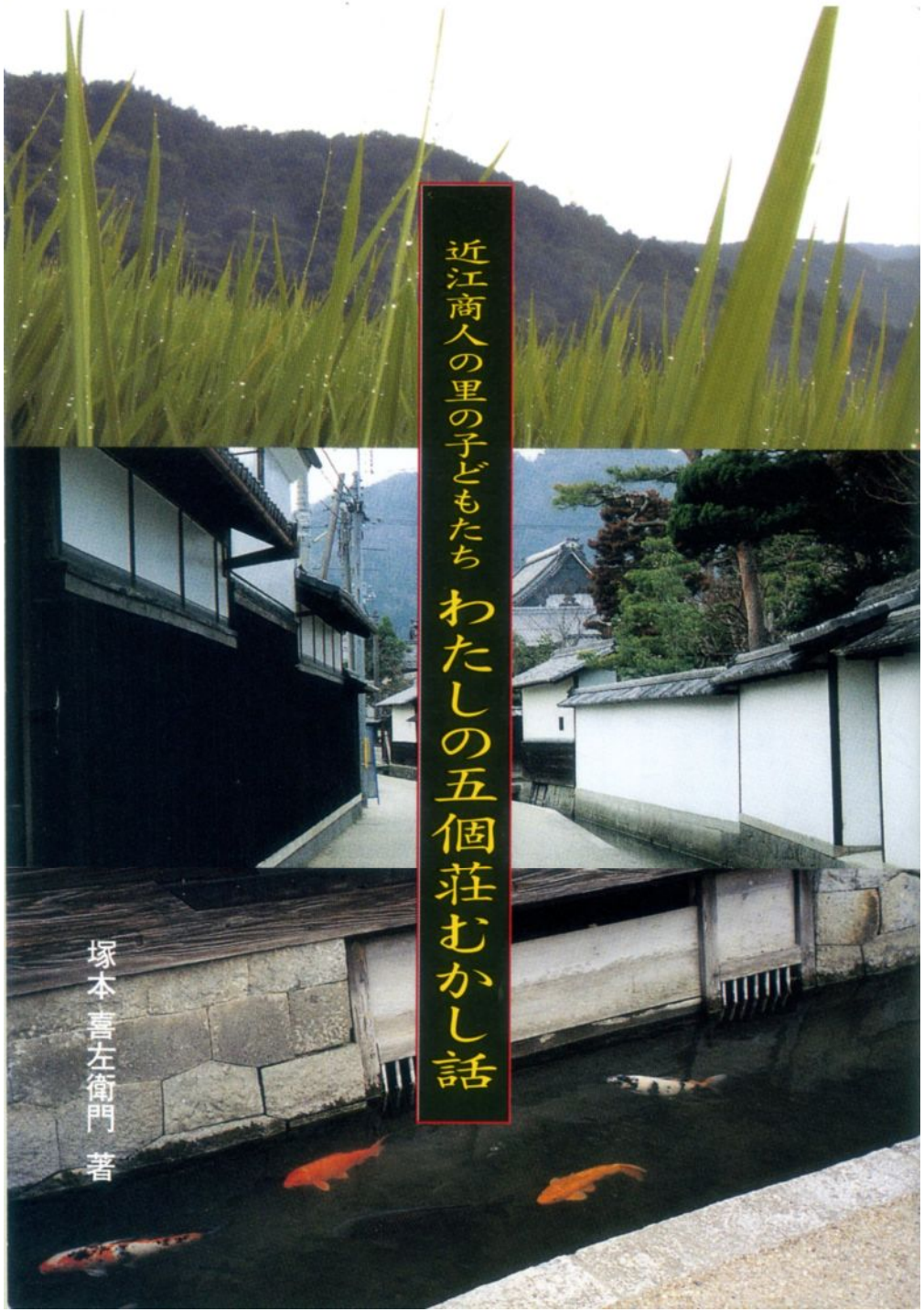


近江商人の里の子どもたち

わたしの五個荘むかし話

塚本 喜左衛門 著

近江商人の里の子どもたち

わたしの五個荘むかし話

目次

2 姉と弟、二人でひとつのお使い
4 夏休み最大のイベント
5 外国のように遠かった隣村
6 世間様のお役に立つ
7 ヒゲのおじいさんはお葬式好き？
8 よみがえる先祖の生々しい話
10 仏前の孫、習わぬ「御文」を知る
12 勉強に一番よく効くお説教
14 わが家固有の権利
16 才覚自慢と負けじ魂
17 近江商人の金庫の中味
18 近江商人の謎――その1、渡来人の影響
19 近江商人の謎――その2、戦国時代に頭角を現す
20 近江商人の謎――その3、明治維新で世界へ飛び出す
22 町並み保存と近江商人の源流
24 鉄格子の中はタイムカプセル
26 自然の力との戦い
あとがき

姉と弟、二人でひとつのお使い

外村　繁邸の表構え

うちのおばあさんは、孫のわたしたちによく用事を言い付ける。その代表例が、おみわさんにおかず持って行ったげて――である。姉弟のもっとも嬉しいお使いのひとつ。

お隣さんは、東京で小説家をしてはる偉い先生、通称「文士のしげるさん」（外村繁）の家。そのお母さんの名が「おみわさん」だ。

それで、わたしと姉が、二人並んでとことこと独り住まいの老婆におかずを届ける。

おかずといっても、ナスビや小芋の炊いたんといった日常的なおばんざい。それを食器ごとカゴに入れて持って行く。

外村　繁邸の台所

私（小一）と姉（小三）

おみわさんの家は暗くて天井が高い。明かり取りの天井窓から一条の光が降りていて、見上げると眩しいのだ。よお、来たなぁ。暗がりから出て来たおばあさんが言って、幼い二人に持ち切れないほどのお菓子を包んでくれる。

二人は、ごほうびのお菓子とおみわさんの暖かい気持ちに包まれて、自分たちのおばあさんの待つ家に帰る。つなぎあった二人の手が離れた瞬間、おばあちゃん、おみわさんとこ行って来た。そんで、お菓子もろたー。ほぉーっ、よかったなー。と、そんなお使い。

夏休み最大のイベント

馬場の万福寺（右が神輿蔵）

八月十五日の地蔵盆は、子どもたちにとって夏休み最大のイベントだ。「参っとくりゃーす。どうぞ、お参りなはっとぉくりゃーす」

金堂の集落は、およそ二百世帯。十数カ所にあるお地蔵さんからの鉦の音にまじって、子どもたちの呼び声がひときわ賑やか。床几とよしずでつくられた、ほんの二～三畳のスペースが、子どもたちの「晴れ舞台」兼「腕の見せ場」となる。

鉦を叩きながら、お参りを呼びかけた子どもたちに応えて、大人たちがにこにこしながら賽銭箱にいくばくかを投げ入れてくれる。愛嬌たっぷりに大声を張り上げ、お地蔵さんお下がりのキャラメルやら煎餅やらで、両手にいっぱい振る舞いながら、子どもたちの夜は更ける。

翌日、お宿と称する五十年に一度回ってくる世話役の家で、子どもたちの慰労会が催される。子どもたちが頑張って集めた浄財は、お地蔵さんのお慈悲で、子どもたちに公平に分配される（当時の話）。

こうして近江商人の卵たちは、地蔵盆という祖先の霊をまつる行事を通して、仏さんと、世間と、おカネとの微妙な関係について、ちょびっとずつ大人になっていく。

大城神社の春祭り■氏子役員は、明治のハイカラな服装である紋付、羽織、袴に山高帽をかぶり、足は革靴というユニークな姿で参加する。

外国のように遠かった隣村

昔、かまがり池には冷たい水が、こんこんと湧き出ていた。そこにハリヨ＊という四～五センチほどの小魚がたくさん生息していた。いまでは滋賀県ほか限られたところにしかいない、珍しい魚だという。

冷たいきれいな水の中でしか住めない魚で、湧き水があるところだけに住むきれい好き。ハリがあり、ウロコがないのが特徴。釣り人に愛想がいいのか、昔は糸ミミズを餌にいくらでも釣れた。

夏休み中の子どもたちは、朝早くから大忙し。ラジオ体操が始まる前から、昆虫採集のカゴを肩から下げて早朝出動。くぬぎ林はカブトムシの巣窟で、立派なツノを持ったオスや、不思議な光彩を放つカミキリムシなどがいて、男の子たちの宝物となった。ひときわ大きなカブトムシに糸を括りつけ、マッチ箱を引かせるレース。悪ガキ同士でよくやった。

そんな悪ガキでも、隣村は外国のように遠かった。どの村にも子どもなりの縄張りがある。釣竿や網を持って、われらが縄張りに侵入してくる隣村の悪ガキたちとの攻防戦。あれもひとつの、商圏戦略の練習だったのかも。

＊ハリヨ■トゲウオ科イトヨ属の淡水魚。体長4～5センチメートル。生息分布は滋賀県湖東、湖北地方、岐阜、大垣、三重県　東北部。絶滅の危機にある魚の一つ。

世間様のお役に立つ

売り手よし、買い手よし、世間よし。いまではかなり有名になった、近江商人の理念「三方よし」。商売にとって、まず大切なことは「売り手」の採算。

商人はだれに依存することなく、自立の心構えが肝要だ。借金せずに、自分の力で立つ。

でも、「買い手」のお役に立って、お客様に喜んでいただかないと、それは商売じゃない。商いを通じて「世間」のお役に立つ。さらにはその世間様に「ご恩返し」、つまりは、社会貢献できることが近江商人の目標であり、本願だ。こんなことを小さいころから、何千回も説教されたものだ。

五個荘小学校の碑

ヒゲのおじいさんはお葬式好き？

村にお葬式があるとき、必ずヒゲのおじいさんの姿があった。

白い長いヒゲを蓄えたわたしの祖父。優しいおじいさんは、村の子どもたちの人気者。子どもたちの間では、「サンタクロース」というあだ名がついていた。

村長をした甲斐性もんの曽祖父に較べて、ヒゲのじいさんのほうは人柄がよすぎて損ばかりしていた。

雨の日も、風の日も、村八分にあった家のお葬式も、しっかりもんのおばあさんがいやがるのも聞かず、ヒゲのじいさんは欠かさず杖をついて参列していた。みぞれの降ったある日にも、おばあさんの制止をおとなしく聞くふりをして、こっそりお葬式に出て行ったっけ。

そんなおじいさんにも、自分のお葬式の番が巡ってきたとき、村中のひとがあちこちからやってきて、お焼香のひとでいっぱいになった。

ひょっとして、これがヒゲのおじいさんの「世間よし」だったのかな。

よみがえる先祖の生々しい話

近江商人の家。お座敷に入れば、たいがいそこに先祖の肖像を描いた額が架かっている。油絵のこともあれば、写真のときもある。

うちの場合は油絵のそれで、創業者であるおじいさんとおばあさんが柔和な顔つきで、それぞれの額に収まっている。次代の夫婦の額もその横に並べて掲げてある。

家の大人たちは、その額を指し示しながら、

「創業者のおじいさんが商売を始めはった折の苦労は……」

朝日クロニクル20世紀（恐慌・革命・関東大震災／朝日新聞社より）
関東大震災後の日本橋区（現／中央区）人形町

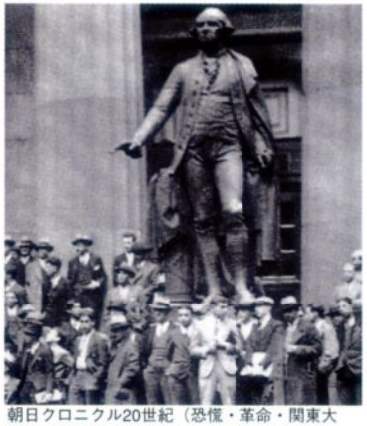
「相場や株でしくじったときは……」

「関東大震災の折は……」

「敗戦と昭和二一年の預金封鎖のときは……」

などなど、ご先祖様の成功の秘訣や危機に対処したときの苦労話を繰り返し繰り返し、耳にタコができるほど言って聞かせる。

かくして、ご先祖様の百数十年にわたる歴史が風化されず、生々しい体験話となって子孫によみがえる。



朝日クロニクル20世紀（恐慌・革命・関東大震災／朝日新聞社より）
ウォール街で株価暴落の混乱の一コマ

ご先祖様の御影は額縁の中だけれど、ほんとうは、ご先祖様は仏様と一緒に仏壇の中におられる。

子どもたちは、幼いときから、おじいさん、おばあさんの後ろにちょこんと正座して、毎晩、ちょっぴり黄色い声を張り上げて、「キミョー、ムリョー、ジュニョライー…」と、神妙な顔をして仏さんにお経をあげる。

それが済むと、今度は親鸞聖人の教えを手紙文の形式でつづった蓮如上人の「お文」＊を読む。手紙文といっても、五百五十年前の文章だから、言葉は難しい。しかし、それを何百回も

(教行寺参道に立つ「蓮如上人御舊跡」の石碑)

鹿子の御影■蓮如上人が六歳のとき、生母が絵師に描かせた蓮如上人の幼像。当時流行した鹿子しぼりの小袖をつけていたところから名付けられた。

仏前の孫、習わぬ「御文（おふみ）」を知る

蓮如上人

聞かされれば、いくら子どもでも自然に覚えるし、内容もそれとなく解ってくる。

親鸞聖人の報恩感謝の念、働くことの尊さ、天職のありがたさ、そしてご先祖様のご恩。そういうのを繰り返し繰り返し、毎日毎晩、仏壇の前で、年寄りが孫に向かって説く。

近江商人の原点というのは、ひょっとしてこれなのかも知れない。

＊御文■御文章（ごぶんしょう）とも書く。蓮如上人が弟子や門徒に書き送った手紙。伝道の役割を担い、これがもとで蓮如は庶民の間で爆発的な人気者となった。

勉強に一番よく効くお説教

学校から帰って来ると、決まってしなければならないのが、おばあさんのお針の仕事場での「ただいま帰りました」と膝をついてのご挨拶。

でも、ときどき、そのままでは済まないときがある。

「今日は、おまえに、よお言うて聞かすことがある」

わっ、またあの話や――。心に思っても口には出さない。

床の間の掛軸を指差しながら、

「ええか！　一番下の絵は真っ黒になって、夫婦で大汗かいて働いてる創業者の図や」

わが家でいう「三代の図」の掛け軸説教の始まりである。

「真ん中のは、仕事をせんと自分の愉しみごとにうつつをぬかしてる二代目の姿。一番上にある絵は、ええか、よお聞きや。三代目が乞食になって、赤犬に吠え立てられてる図や。世の中、忙しうなってきたから、いま怠けてると、おまえがこの三代目みたいに乞食することになるぞ！」

えらい剣幕で始まった話は、これで終わり。耳の奥に残る声の怖さに予定変更。ここと勉強部屋に向かうことになります。

初代の図（下）

二代目の図（中）

三代目の図（上）

わが家固有の権利

喜左衛門と聞いて、なにが思い浮かぶ?。最初の字が「喜」だからいいようなものの、「土」だったら「土左衛門」。これほど縁起の悪い名前はない。その息子が「どら息子」だったりしたら、「ドラエモン」で、意外に人気者になってたりして……。

いやいや、先祖の名前を茶化してはいけません。わたし三六歳、親父七六歳のとき、名前のバトンタッチをしました。親子が存命中に同姓同名で入れ替わるとは——。区役所は、断固拒否。よくよく考えてみれば、相続やらなにやらで税務署も大変。警察署、法務局も渋い顔。

それにしても戦前まで京都や田舎で当たり前の風習やった襲名があかんて、どういうこっちゃ?けれど、わが家固有の権利は守らなあかん、ということで、六代目の襲名目指しての戦いが始まりました。

お寺の過去帳、役場の鬼籍謄本、大正時代の宮内庁ご用達(鷹の羽染黒紋付)のセピア色の記念写真などなど、あらゆる書類関係を山ほど集めて、風呂敷に包んで家庭裁判所に持ち込みました。熱意(?)通じて、親子で「襲名による名の変更」というのを認めてもらいました。

襲名後、一番イヤな顔をしたのは、わたしの姉たち。なんせ、弟を親の名前で呼ばなければならないのですから。いっぽう、父の妹は「四郎兄さん!」と、子ども時代に戻ったように晴れ晴れとした表情。

違い鷹の羽(拙宅の家紋)

わが家の巨木・貝塚息吹

才覚自慢と負けじ魂

商人の家には、それぞれ家訓というのがあります。京都などでもそうですが、近江商人のそれに共通していることは、真っ先に「互譲と融和」を掲げていることです。

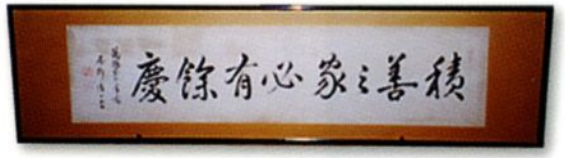
才覚を誇ったり、負けじ魂を持つことは、店、すなわち組織を崩す最大要因とみたのです。強みと弱味は両刃の剣。

第二番目に重要なのは、倹約と早起きです。時間とカネをとことん有効活用するよう戒めています。カネ儲けは、生活習慣にあり。

第三は楽しみ・芸事を謹み、人との交際範囲を慎ましくすること。つまりは、仕事へ精神を集中し、時間を有効に使えということです。ちょっと辛いことですねえ。

第四は、世間よしを実行し、世の中のお役に立つ。それを人生の使命としました。

ちなみにわが家の家訓は「積善の家に必ず余慶あり」、つまり、善いことをすると、必ず子孫に幸福がやってくるという戒めです。



近江商人の金庫の中味

近江商人は、昔から、商いをやるなら、財産は三つに分けておけと言われてきました。近世的な感覚でいうなら、「預金」・「土地」・「株」という、この三つ。近江商人の三分法といわれます。

あるユダヤ人にこの話をすると、まさしくユダヤ商法では黄金律＊の中核であって、「永続きするための鉄則」であると言われてしまいました。

そんなわけで、わたしも近江商人の黄金律に倣って、本業を「きもの」・「宝飾」・「毛皮」という三つの専業部門に分けました。急所は、互いのシナジー（相乗効果）をどう図るかということです。

そして、会社の資産を「本業」・「不動産」・「財務」と三分の一ずつに配分しました。財務は「預金」・「債権」・「株式」に分け、それぞれ「円」・「ドル」・「ユーロ」に分散投資しました。不動産は「オフィスビル」・「商業施設」・「マンション」にし、地震に備えて「関西」・「東京」・「九州」に地域を分散しました。

これからは、時代に合わせて近江商人の先人の商法を活かして行かねば……。

＊黄金律■このほか、ユダヤ商法で有名な黄金律に七八対二二の法則というのがある。例えば、世の中の金持ちは二二％の者が七八％の富を持ち、残り七八％の人間が二二％の利益を分け合っているということ。

近江商人の謎

——その①〈渡来人の影響〉

広隆寺の半迦思惟像■広隆寺は朝鮮から渡来した豪族秦氏が聖徳太子から仏像を賜り、推古30年（622）に建立した氏寺。

琵琶湖の湖東地域。そこには、驚くほど多彩な実業家が輩出しています。けっこう上場会社が多いのです。一説には、その出現率は全国平均の五十倍に相当しようと言われているほどです。

六世紀、新しい文化が中国大陸を渡り、朝鮮半島を経て若狭へと上陸しました。そこから、いわゆる渡来文化が琵琶湖の東側を通り、奈良に持ち込まれたのでした。

近江には、百済寺（ひゃくさいじ）、秦荘（はたしょう）という地名でも知れるように、多くの帰化人が湖東にやってきて定住しました。シルクロードからやってきた新しい優れた文化、そして渡来人との血の交流……。

そうしたハイブリッドな文化の育成が、近江文化独自の下地を形成して行ったのでしょう。

朝鮮の寺院「松広寺」の全景■韓国全羅南道松広面、かつての百済の地にも華蔵寺・松広寺など広大な寺域と伽藍が残る。

近江商人の謎

——その②〈戦国時代に頭角を現す〉

戦乱の世を平定した後の秀吉は、政治を大老・老中に委ね、経済を五奉行に任せました。その五奉行は石田三成をはじめ、全員が近江出身の官僚でした。

近江の湖東一帯には、有名な古戦場が密集しています。つまり、それほど情報と交易に有益な要害の地であったということです。京都・堺と江戸・尾張を一直線に結ぶという一大交差点です。信長が安土で行った楽市楽座などで貨幣経済が浸透し、近江はまさに経済的に熟成した地域に成長したのです。

いっぽう、浄土真宗の報恩感謝、勤労を尊ぶ宗教的倫理観に支えられ、「おかげさまで……」の精神で、朝から晩まで商いに精を出しました。

安土城の天主

織田信長の肖像

近江商人の謎

——その③〈明治維新で世界へ飛び出す〉

彦根藩の井伊家は、十九世紀初頭には統制経済の解除に踏み切り、藩内での行商の自由化、他藩への持ちだし行商も許可制にするなど、矢継ぎ早に禁制の解除を行っていきました。

彦根藩札を発行し、金と同じ兌換性をもたせるなど、経済の振興に力を入れたのです。その結果、近江商人は他藩に出店を構え、人材の育成、資本の蓄積、複式簿記といったマネジメント能力の向上を図り、力を蓄えていきました。

大城神社

そこへ、明治維新。幕府が仕切っていた規制は一挙に崩壊し、市場経済化が進みました。こうして近江商人は他藩の商人に先駆けて日本中へ、そして世界中へ雄飛していくことになったのです。

天秤棒を持つ近江商人

お帳場と結界

町並み保存と近江商人の源流

五個荘金堂地区は、平成一〇年にわが国五〇番目の「重要伝統的建造物群保存地区」として文化庁から選定されました。

町は、白壁の蔵、焦げ茶色をした杉の焼き板塀、赤茶色をした紅殻の柱、瓦屋根の濃いグレーといった風に色調が統一され、美しい町並みを誇っています。

しかし、その町並みは、江戸時代後半から大正時代を「現状」と考えていますから、アルミサッシはいけない、ガレージは困るということで、クルマやエアコンのない「古い時代」に逆行。妻たちのイライラは募ります。

五個荘金堂の町並み（外市）

日本人の心の故郷としての町並みを保存し、近江商人の源流としての五個荘の「生活文化」を大切にしたいもの。

貝塚息吹の天辺からの眺望

町並みの掘割に鯉が泳ぐ

鉄格子の中はタイムカプセル

蔵は火事と盗難に対して、厳重に装甲されています。外壁としては土壁の上に漆喰をほどこし、外板は舟板の古材を使って腐敗防止と難燃性に工夫を凝らしています。窓は鉄格子、扉は二重。これで火事にも盗難にも強い蔵の出来上がりです。

火災があったときは、何層にもなった密封性の高い扉の縁に、生味噌を厚く塗ってから扉を閉めます。中は一種の真空状態ですから、酸素がないかぎり、燃えないというわけです。しかし、炎が収まってもすぐに開けてはなりません。火事にあった蔵は二日間たってから開封せよ、との先祖の教えがあります。

蔵の中には大したものは入っていないけれど、一階は陶磁器、二階は漆器や布団、きものなど。なかでも掛け軸など湿気やすいものは一番高いところに仕舞うようにする。地震や湿気に備えて、どんなものをどこにどう置くか、配置は昔から決まっています。

そんな蔵は、まさにタイムカプセル。時代がいっぱい詰まっているのです。

廃船の舟板を利用した塀

＊貝塚息吹■ヒノキ科の高木で、園芸品種。幹は直立して枝は太く、側枝はねじれ、円錐形の樹形をなす。生け垣や庭木として用いられる。

子供の頃、雪を固めてソリで遊んだ岩

自然の力との戦い

庭は生き物である。ああは見えても日々成長している。そんな庭を一年中眺めている、一本の太い常緑高木がある。

ヒノキの一種、貝塚息吹＊だ。わが家の貝塚息吹は、二五メートルほど。りゅうとした入道のように、庭の一番奥にどっしりとした姿を見せている。この天辺はトンビの巣になっていて、蛇やネズミの骨がいっぱいある。

枯れ山水の築山の滝口から川が流れているのだが、長年の星霜を経て、いまでは松の木の根が川床を突き破ってしまっている。地震は燈籠を傷め、松食虫は松を枯らし、草木は伸びる。

「権兵衛が種蒔きゃ、カラスが――」のクチではないが、まさに人間と自然のイタチごっこ。ご先祖様の風雅な営みを守っていくのは、じつに骨の折れる仕事なのです。

母屋の二階からの眺望

あとがき

この小冊子は、わたしの幼い頃の思い出をたどり、近江商人の子育てのあり方を記したものです。現在の自分を反省すると、自分の至らなさを恥じるとともに、自分自身に注がれてきた両親と姉たち、祖父母、先祖、さらには五個荘のひとたちの、深くて豊かな愛情を感じ、感謝の念が胸の奥底から噴き出てまいります。

勝徳寺さんや役場の方々、拙宅の保全にご尽力していただいている大甚さん、西村さん、壁治さん、花繁さん、塚本昭太郎さん、北川信一さんをはじめ、多くの方々のご支援に心より感謝申し上げます。

ＮＰＯ三方よし研究所や、多くの先輩・仲間に助けられ、そして、妻や息子たちの協力によって「近江商人の魂」を次代へ受け継いでいく活動を、これからもずっと続けていきたいと思います。

最後になりましたが、毎回、編集発行にご尽力いただいているコクソンの大淵さんの永年の友情と、ご縁あって拙文をお読みいただいた方々に心より御礼申し上げます。

平成二十一年九月吉日

塚本喜左衛門

近江商人の里の子どもたち

わたしの五個荘むかし話

2009年9月15日　第二版
発行者　塚本喜左衛門
写　真　塚本喜世志．他
編集デザイン
有限会社コクソン・インターミディエート・ラボラトリ
発行所　塚喜商事株式会社
京都市下京区烏丸通仏光寺上ル二帖半敷町６６１
ＴＥＬ(０７５)３４１－１１０１
ＦＡＸ(０７５)３４３－４００４
著者eメール　kizaemon@tsukaki.com